書評・新刊紹介

佐藤仁史・太田出・藤野眞子・緒方賢一・朱火生編著
『中國農村の民間藝能―太湖流域社會史口述記録集2―』

廣 田 律 子

本著は、序文にあるように、太田出・佐藤仁史編『太湖流域社會の歴史學的研究―地方文獻と現地調査からのアプローチ―』（汲古書院 二〇〇七年）、佐藤仁史・太田出・稻田清一・吳滔編『中國農村の信仰と生活―太湖流域社會史口述記録集』（汲古書院 二〇〇八年）に續く三冊目となる調査研究の成果である。

關連する調査研究は、太田出代表科學研究費補助金基金研究B（二〇〇四～二〇〇六年）「清末民國期、江南デルタ市鎮社會の構造的變動と地方文獻に關する基礎的研

究」及び同（二〇〇八年～二〇一一年）「解放後、太湖流域農漁村の『郷土社會』とフィールドワーク」、佐藤仁史代表科學研究費補助金若手研究B（二〇〇六年～二〇〇八年）「清末民國期、江南デルタ農村の地域統合と民間信仰に關する基礎的研究」の一環として實施された。この三冊は、高著として、すでに複数回書評に取り上げられている。^①

評者はフィールドワーカーとして八十年代から華中華南地域をフィールドに民間祭祀藝能の研究を行なってい

る。宣卷に關係する民間藝能としては、女神陳靖姑の信仰と藝能調査の中で「唱南游」の上演を、また江蘇省靖江市で開催された學會參加の際「靖江講經」の上演を拜見したことがあるが、はなはだ淺學の身であり恥ずかしながら評者として適任とはいえない。しかしながら本著は、十年に満たない期間にもかかわらず、地元の方々の惜しみない支援を受け、精力的な現調査研究を積み重ねられ、見事に成果が結實されており、中國研究の新展開への可能性と新たな目標が示されていると考へ書評をさせていただくことにした。

本著は江南吳江地域における民間藝能特に宣卷をメインテーマとし、構成としては第Ⅰ部には解題論文四本が、第Ⅱ部には十一名の話者からの聞き取り調査の記録が、第Ⅲ部には演者である朱火生氏の上演に使われていた寶卷資料及び附録の資料が収められている。

藤野眞子「中國江南における宣卷の上演狀況」は、實際の上演の觀察や、藝人からの聞き取りをもとに、江南吳江市の宣卷の特徴に關して上演形式、樂曲、テキスト、

藝の傳承、藝人の演技術、他の説唱藝能や地方劇との關係、演目等から明らかにしており、結果的に江南吳江市の宣卷を中國藝能研究の舞臺に上げること成功している。最後に宣卷繼承の將來の見通しについて、説得力のある根據を舉げて言及している。

緒方賢一「吳江宣卷のテキストについて―朱火生氏の寶卷を中心に―」は、かつては人氣を集めた演者で調査者と特別な關係を築くことができた朱火生氏が、上演で使用するために自ら書き記した、臺本ともいえる寶卷について、その内容や形式に他のテキストと比較を試みつつ検討を加え、朱氏寶卷の特異性を明らかにしている。テキストと聞き書きから、朱氏の独自の几帳面で進取に富む上演スタイルを生々しく展開している。

佐藤仁史「江南農村における宣卷と民俗・生活―藝人とクライアントの關係に着目して―」は上演記録と聞き書きの分析をもとに、宣卷上演の依頼者、依頼動機等の上演の場面の變化を明らかにしつつ、宣卷と民俗・信仰との關係について論を展開している。宣卷を支えるクラ

イアントについてや生活様式や信仰の變化に伴う無形文化遺産の宣卷の抱える繼承問題についても言及している。

太田出「太湖流域漁民と劉猛將信仰―宣卷・贊神歌を事例として―」は、新聞記事・文史資料・地方志等の文献資料や聞き書きをもとに、太湖流域の漁民の劉猛將に對する信仰と劉猛將にかかわる宣卷・贊神歌の上演者(漁民)とその活動について明らかにしている。

本書の各論では、宣卷を上演する演者と上演内容、演者の經歷、上演の機會、依頼者、信仰的背景等宣卷の傳承者だけでなく傳承を支え受容する社會とその變化にまで言及し、種々な角度から立體的に宣卷藝能を明らかにしようと試みがなされている。本書に示された微に入り細を穿つ臨場感溢れる聞き書きと現役の藝人が使用してきた膨大な寶卷テキストには、フィールドワーカーとして壓倒される。大變有意義な成果公開であり、まずよくここまで収集できるだけの人間關係を話者との間に築けたものだと感心しきりである。

中國でのフィールドワークは依然として種々な制約が

ある。特に民間信仰にかかわる調査は迷信としてやり玉に擧げられてきた過去の経緯もあり、繼續して特定の相手を対象として調査することは相手にとつても迷惑をかけることに繋がる恐れもあり、なかなか實現が難しい。その中、本書は対象との間で固い信賴關係を結んだ上、學術的な調査を繼續的に積み上げている。その上で分析論述がなされ、結果として一地域の特徴ある民間藝能が藝能研究史に位置附けられるだけの價値ある研究成果をあげること成功している。文章外にメンバーのどれだけの努力や人々のご縁や感動があったか想像するだけで胸が熱くなる思いがする。今後本書で公開された貴重なか口述記録と寶卷資料がさらに活用され、研究が深められると確信している。

評者が江蘇省の實際の宣卷の上演を目にしたのは二〇〇七年八月靖江市孤山鎮でのことで、江蘇省靖江市人民政府と東南大學東方研究所主催の「二〇〇七中國靖江寶卷文化國際學術研討會」のエクスカージョンに組み込まれていた。祭壇には神像と宣卷につきものの穀桶に粃が

満たされ、鏡・物差し・鉢・灯明が入れられ置かれていた。まず男性の演者が詠唱をし、五・六名の人々が唱和する形で進められ、木魚や鈴が鳴り物とされていた。靖江の寶卷は、『中國靖江寶卷』上下 龍紅主編(江蘇文藝出版社 二〇〇七年)に收められ、神々に關連する内容の聖卷と民間傳承を題材にした草卷と祭祀に用いる唱えごとの科儀卷に分類されている。二〇〇六年に靖江宣卷が江蘇省の非物質文化遺產に登録されたのを記念し、代表的な宣卷は『靖江講經』(中國國際廣播音像出版社 二〇〇六年)としてDVDになり公開されているが、同書には演者の詠唱にあわせ字幕が附されている。DVDに收められた演者の詠唱と『中國靖江寶卷』に收められた寶卷が一致する場合、七言詩讚詩の韻文の吟誦歌唱と散文の講説について曲節の違い等理解できる幅が広がる。寶卷のはじめの部分では、寶卷のありがたさが述べられ、言祝ぎが行なわれるのだが、この開始部分から寶卷の本文まで、登場人物・場面設定など筋立ては同じであつても文言は演者によりかなり違いがある。『中國靖

江寶卷』の草卷には唯一朱氏本に共通する『白鶴圖』が收められているが、文面は演者の脚色による差があり、單純には比較できそうもないと感じた。

本著によれば吳江においても演者が施主や觀衆の嗜好に合わせ臨機應變に演じられるという。この世で一度限りの上演であるからこそ現役時の朱氏の上演風景と朱氏本が組み合わされ目にするのができたらと贅澤なことを考えてしまう。寶卷は、種本はあるものの臺本として使用されるので聞き手の好みに合わせて演者独自の工夫が加えられ、編集が加えられた世界に一つしかないテキストといえる。今後、他地域の寶卷との不易と差異や藝人による不易と差異が分析され、普遍性と特徴が明らかにされることが望まれる。さらに民間信仰との關連にも目配りした分析が行なわれ、吳方言地區で流行する地方劇や曲藝等種々の民間信仰と結びついた藝能との比較により、影響關係の解明の進展に繋がると考える。

寶卷がどのように用いられるのか立體的に把握するために、宣卷の實際の演唱に際して漢字テキストに附され

る音訓について、言語學的視點からの分析、流行を踏まえて地方劇や他の曲藝から臨機應變に導入される演唱の曲調について音楽學的視點からの分析も望まれる。

宣卷に缺くことができない祭祀に關連することから、つまり祭場や祭壇の様子、實際の所作や唱えごと、招へいされる神明名、願掛け願ほどの内容、供物、施主の役割、宣卷を聞く人々の様子等についての言及も望まれる。

演者としてのすべてを傾注した臺本の公開閱覽を許してくださった朱火生氏には、この本の讀者として感謝の念を抱かずにはいられないが、朱氏から五年以上にわたって聞き書きを積み重ねされており、質量ともに膨大なものとなっているようである。朱氏の口述記録からオーラルヒストリーがまとめられる可能性があると期待する。本書の著者の力量を鑑みれば要求のレベルはさらに上がるばかりである。後に續く研究者の目指そうとする到達點を示していただきたいと願うからである。

註

- (1) 一・二冊目『太湖流域社會の歴史學的研究―地方文獻と現地調査からのアプローチ―』及び『中國農村の信仰と生活―太湖流域社會史口述記錄集』の書評は、水盛涼一により『集刊東洋學』第九十九號(中國文史哲研究會九四―一〇三頁、二〇〇八年)、森正夫により『史學』第七十八卷第一・二號(三田史學會、一七一―一九九頁、二〇〇九年)、田村和彦『中國研究月報』第六十三卷第九號(一般社團法人中國研究所、三三二―三四頁、二〇〇九年)、三冊目の本書の書評は、瀬戸宏により『中國研究月報』第六十六卷第十二號(一般社團法人中國研究所、四二―四六頁、二〇一二年)、戸部健により『社會經濟史學』第七十八卷第四號(社會經濟史學會、六一九―六三一頁、二〇一三年)で行なわれている。

(A5判、四四八頁、二〇一一年七月、

汲古書院、四五〇〇圓(税別))